

## 創立130周年記念展示会

# 「関西大学のちから～伝統への自信 未来への考動～」 「智から－叡智」に関して

高橋 沙希

平成28（2016）年10月5日（水）から11月14日（月）を会期として、関西大学創立130周年記念展示会「関西大学のちから」が2会場で開催された。

第1会場では関西大学博物館において「関西大学のちから～伝統への自信 未来への考動～」を、第2会場では大阪歴史博物館8階の特集展示室において「〔特集展示〕関西大学蔵 本山コレクションの精華」を開催した。

特典として、会期中に両会場を観覧された方に、先着で一筆箋やエコバックなどのオリジナルグッズを進呈し、好評を得た。

第1会場の「関西大学のちから～伝統への自信 未来への考動～」では、「大阪に生まれた大学として、知の精神を受け継ぎ、『考動』力あふれる人材の育成拠点を形成し、人と人とのつながり（＝学縁）を大切に作るなかで、さまざまな『ちから』を蓄えてきました。」と記し、「知から－大阪」「道から－伝統」「智から－叡智」「馳から－スポーツ」「千から－コレクション」の5つのテーマで、関西大学所蔵の名品を紹介した。



エントランス

ここでは筆者が担当した「智から－叡智」について触れる。

「智から－叡智」では東西学術研究所・泊園記念会から3点、図書館から10点、博物館から3点、計16点を出品し、大坂で叡智を吸収しながら活躍した画家たち、つまり大坂画壇の絵画作品を中心に展示した。また、京都で作陶され

ている木村盛康氏からご寄贈頂いた陶芸作品なども陳列した。

近年では注目されつつある大坂画壇であるが、これまではほとんど注目されてこなかった。その要因として、近代美術史学が主に西洋美術との関係を重視したこと、日本美術史の基盤を作った岡倉天心が大坂画壇を評価しなかったことなどが挙げられる。そのため大坂画壇の作品の多くが失われたり、海外に散在したりしている。

そのような中、関西大学図書館では、長年にわたって大坂画壇の絵画を蒐集してきた。現在では、大坂に関係する約700点もの貴重な作品を所蔵している。これらの作品は主に本学文学部の山岡泰造名誉教授と中谷伸生教授によって蒐集・研究が進められてきた。それに伴い図書館では、『関西大学蔵 大坂画壇目録』（関西大学図書館、1997年）や『関西大学創立120周年記念 大坂画壇の絵画－文人画・戯画から長崎派・写生画へ－』（関西大学図書館、2006年）などを刊行している。

今回展示会に出品された大坂画壇の作品をいくつか紹介しておく、まず木村兼葭堂（1736～1802）の《花蝶之図》（図書館蔵）〔図1〕が挙げられる。絹本着色で、縦33.2cm、横21.5cmの小作品である。画面右下には、墨書で「撫清人鄭山如設色於澄心齋中」（清人の鄭山如を撫って澄心齋の中で描いた）と記されている。



〔図1〕木村兼葭堂《花蝶之図》

木村兼葭堂は、酒造業を営みながら、本草学などの多くの学問に触れた博学であり、文人交流の要ともなった人物である。池大雅（1723～76）に師事し、文人画家として絵画

を描いているが、それらは《花蝶之図》と同じく小作品が多い。

《花蝶之図》には、画面右側から左下に向かって生える、淡い朱色と緑色の葉を持った太い枝が描かれている。強弱のある輪郭線からは、樹木の生命力を感じる。その枝に絡まるように、青紫色の朝顔が茎を伸ばす。画面左上には、それらの植物に引き寄せられた、澄んだ青色の目と白色の羽を持つ蝶が優雅に飛ぶ。背景に何も描かれていないことによって、植物や蝶のモチーフの鮮やかさと美しさがより際立っている。

木村兼葭堂の絵画は評価が高いとはいえないが、この作品はまさに彼の実力を示す作品だといえる。

上田耕夫(1759/60～1831/32)の《寿福図》(図書館蔵)〔図2〕は絹本着色で、「寿福」、つまり長命と幸福が主題となっており、画面中央には七福神の一人である福祿寿が笑顔を浮かべている。その隣には福祿寿の持ち物である経巻を背中に乗せた、つぶらな瞳の鹿が立っている。画面の周囲に描きこまれている赤い描き屏風や、青空の背景に記された文様のような文字が美しく、非常に手の込んだ作品である。上田耕夫の作品はほとんど遺存しておらず、本作は大変貴重だといえよう。

大坂・難波出身の女性画家である野口小蘋(1847～1917)の《溪山秋霽》(図書館蔵)〔図3〕は明治31(1898)年に描かれた絹本着色の作品である。縦185.7cm、横85.0cmの大画面には霽のかか



〔図2〕 上田耕夫  
《寿福図》



〔図3〕 野口小蘋  
《溪山秋霽》

る岩山の美しい秋景が広がる。山頂を見上げる高遠、前から後方の山を眺める平遠、画面奥の山を眺める深遠の三遠方の構図で描かれている。加えて、荒井菜穂美氏は、溪流については西洋の遠近法である一点透視図法が意識されていることを指摘し、「南画的な構図に西洋的な空間表現が無理なく組み合わされている。」(注1)と述べている。つまりこの作品からは、野口小蘋の新しい着想をも理解することができる。

四条派に学んだ深田直城(1861～1947)の《水辺芦雁図》《雪中船舶図》(図書館蔵)〔図4〕は、紙本墨画淡彩で、閑々たる水辺と芦雁の群れが描かれた双幅の作品である。

右幅の前景に水辺で戯れる芦雁、遠景には数隻の船がある。一方左幅は雪景色で、画面中央に大きく船が描かれ、遠景には芦雁が飛ぶ姿がみえる。全体的に穏やかで丁寧な筆致となっており、画面には落ち着いた雰囲気が漂っている。



〔図4〕 深田直城  
左幅《雪中船舶図》 右幅《水辺芦雁図》

以上の作品の他にも今回の展覧会では、多くの貴重な資料が展示された。それらの資料は、まさに関西大学が、知の精神を受け継ぎ「考動」力あふれる人材の育成拠点であることを証明する一端だといえよう。

(注1) 荒井菜穂美「明治時代の南画 野口小蘋を中心に」(『文化交渉東アジア文化研究科院生論集』3号、2014年)、13頁。

参考文献：

中谷伸生『大坂画壇はなぜ忘れられたのか 岡倉天心から東アジア美術史の構図へ』(醍醐書房、2010年)。

博物館学芸員